

試験日 ： 2025 年 9 月 13 日（土）

入試種別 ： 大学院入学試験(4 月入学)修士課程 秋期試験 一般入試

学部・研究科： 文学研究科 東洋史学専攻

科目名 ： 専門科目

解答又は解答例

設問 次の問一～問三に答えなさい。

問一 (1)(2)

【解答例について】 東洋史学の学問領域に関する知識を問う問題である。解答が一義的ではなく、解答例の提示はなじまないことから、採点のポイントを示す。

(1)は、中国史の流れをふまえて、科挙の歴史だけではなく、その前史を述べられるか、あわせて人材を輩出する社会の性格と人材登用制度のかかわりを、歴史の経過にそって述べられるか、研究のための基礎的な知識をふまえているかなどの点を評価する。

②は、イクター制が、軍人への俸給として徴税権を与える制度であったこと、また、アッバース朝期にとられていた徴税制度と俸給制度を理解し、その破綻からイクター制導入への歴史的経緯が説明できているかどうか、解答のポイントとなる。

①あるいは②の答案について、それぞれ右の点をふまえて、総合的に評価する。

問二

【解答例について】 当該問題は、受験生の史料読解能力を問うものである。採点は問題文を正しく読解し、理解しているかを踏まえて、総合的に評価する。以下に掲げる書き下し文・要約はあくまで解答の一例である。

①解答例

陸徳明、蘇州呉の人なり。初め、學を周弘正に受け、善く玄理を言う。陳の太建中、太子四方の名儒を徴し、承光殿に講ぜしむ。徳明年始めて弱冠、往きて焉に參ず。國子祭酒徐克開講し、貴を恃みて縦に辨じ、衆、敢て當るもの莫し。徳明獨り與に抗對し、合朝賞歎す。解褐して始興王國左常侍となり、國子助教に遷る。陳亡び、郷里に歸る。

②解答例

蘇州、呉県の出身の陸徳明は、周弘正を師として高い学問の水準に到達した。南朝陳の太建年間、太子(陳叔寶)が各地から名儒者をあつめ講義させた。国子祭酒の徐克は、高貴な家柄出身であることを誇り縦横無尽に講義したが、質疑討論できるものはいなかった。ただひとり二十歳の陸徳明だけが対抗して議論したので、朝廷の内外の人々が称賛した。初任官には、始興王の国の左常侍となり、国子助教に昇進した。陳が滅ぶと、帰郷した。

問三(1)

【解答例について】当該問題は、受験生の史料読解能力を問うものである。採点は問題文を正しく読解し、理解しているかを踏まえて、総合的に評価する。以下に掲げる書き下し文、現代日本語訳はあくまで解答の一例である。

(1)①解答例

上、乾清宮西煖閣に御し、王大臣及び文武諸臣を召して入らしめ、諭して曰く「朕、即位より以來、聖祖付託の重きを念うに、安んぞ怠忽し、長久の慮を爲さざる可けんや。當日、聖祖、二阿哥の事に因り、身心憂悴し、殫くは述べる可からず。今、朕の諸子は尙お幼く、建儲の事、必ず須らく詳らかに審慎を加うべし。此の事、擧げて行なう可からざると雖も、然れども預め之が爲に計らざるを得ず。今、朕、特に此の事を將て、親ら寫して密封し、匣内に藏し、之を乾清宮の正中、世祖章皇帝の御書「正大光明」匾額の後、乃ち宮中最高の處に置き、以て不虞に備う。諸王大臣みな宜しく之を知るべし。」

(1)②解答例

雍正皇帝は、乾清宮の西煖閣にお出ましになり、諸王、大臣および文武の諸大臣を召して閣に入らせて、こう諭した。「朕は、即位以來、聖祖康熙帝からまかされた責任の重さを痛感するので、おこたることなく、国家の永遠の繁栄を模索しなければならない。当時、康熙帝は、(皇太子だった)二兄の問題で、身心が衰弱していたので、その間の事情をくわしくは述べることはできなかった。今、朕の諸子はまだ幼く、皇太子を建てる問題は、慎重に時間をかけるべきだろう。この問題は明確には決定できないとはいえ、あらかじめ備えてはおくべきだろう。今、朕は、立太子の問題について、自ら書いて密封し、箱に入れ、乾清宮の中の、世祖順治帝の親筆である「正大光明」の額の後、つまり宮中最高のところの所に置き、不虞の事態に備える。諸王、大臣はみなこのことを知っておくべきである。」

問三(2)

【解答例】当該問題は、受験生の史料読解能力を問うものである。採点は問題文を正しく読解し、理解しているかを踏まえて、総合的に評価する。以下に掲げる現代日本語訳はあくまで解答の一例である。

(2)解答例

中国にまでも知識を求めるようにという預言者ムハンマドの指示は、初期の多くの学者たちによって、宗教諸学、とりわけクルアーンの注釈やイスラーム法学文献を収集し分類するために、イスラーム世界をくまなく旅することへの誘いと考えられた。適切で正しい学びは、口頭による伝達に拠っていた。偉大な学者の足下に座して、彼（あるいはたまには彼女）が暗唱するのを聞くことによって知識を得ることが不可欠だったのである。11世紀後期のスペインの学者、イブン・アル＝アラビーを取り上げよう。彼は、東方への彼の旅を描写するリフラ（旅の日誌）を書いた。24歳の時、彼は、自らの父親とともに、巡礼を果たすために、それだけではなく、彼自身の言葉によれば「知識を求めたいとこの上もなく望んで」出立した。彼は、アル＝アンダルス出身のムスリムとして、東方イスラーム世界の学者たちが彼に教えることのできるものを知りたいと熱望したのである。

彼は、北アフリカ沖での恐ろしい難破を生き残ったが、その時、船はバルカ近くで木っ端微塵となった。彼以前の他のスペインのムスリムたちと同様、長旅の多大な努力がひとたびなされてしまえば、彼は多年にわたって東方で過ごした。彼は、主にエルサレムに滞在した。彼は故郷に戻ると、自分が新たに得た知識を自分自身の同郷の者たちに伝えたが、彼らの殆どは自分自身で旅をする財力を持っていなかった。